

【研究論文】

若手保育者が抱える造形活動に対する課題意識 —保育経験 2、3 年目の保育者を対象とした講習における質問紙調査からの検討—

横田 典子* 米窪 洋介* 野田 美樹* 佐善 圭**

要 旨

本研究は、保育経験 2、3 年目の保育者を対象とした講習において実施した質問紙調査の回答を用いて、若手保育者が抱える造形活動における課題を明らかにし、講習の改善に繋げることを目的とした。調査の結果、「造形に関する知識・技能」と「子どもとの関わり」に関する課題が多いことが読み取れた。考察からは、若手保育者にとって「結果」よりも「過程」に充実感をもち、自分なりの表現やイメージを楽しむ経験を積む機会になると同時に、日常のあそびや生活と造形活動を結び付け、あそびを大切にしたい保育が造形活動の楽しさに繋がっていることを体感できる講習内容の考案が今後の課題として示唆された。

キーワード：若手保育者、造形活動、課題意識、質問紙調査

I. はじめに

幼児教育の重要性への認識が高まり、幼児教育・保育の「質の向上」が課題となっている今日、保育者の資質・能力、専門性の向上だけでなく、人材の不足、早期離職等による勤務年数の減少に伴う、職員の平均年齢の低下も重要な課題となっている。そのようなベテラン保育者が少ないという現状の中、筆者らの在籍する岡崎女子大学・岡崎女子短期大学では、平成 28 年度より A 市からの委託事業として、若手保育者が抱えている「指導法の拡大やその活かし方や深め方」⁽¹⁾ という課題を改善するため、保育経験 2、3 年目の保育者を対象とした講習（以下、本講習）を実施している。令和元年度で 4 年目を迎え、本講習の造形コースを担当する筆者らは、若手保育者が養成校で学んだ知識や技能を保育現場で活用する際に直面する、造形活動特有の課題があると感じている。

本研究は、これまでに本講習を受講した保育者に対して行った質問紙調査の回答を用いて、若手保育者が抱える造形活動における課題を明らかにすることで、本講習の改善に繋げることを目的とする。

II. 造形活動に必要な保育者の資質・能力

まず、保育者が抱える課題を分析するための手がかりを得るため、造形活動に必要な保育者の資質・能力について、考察を加えることにする。

1. 造形表現における保育者の資質・能力に関する先行研究

保育者の資質・能力については、文部科学省委託事業「短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究」成果報告書にて、幼稚園教諭および保育士として重視する能力がそれぞれ全 64 の項目について調査されている¹⁾ 等、多くの先行研究がある。

造形に関する調査も行われており、松下（2016）が、保育者に必要な造形能力を、「絵を描く能力」、「工作をする能力」、「活動を支える能力」の 3 つに分類して考察を加えている²⁾ ほか、智原ら（2015）は、保育者として求められる造形表現に関する能力について、「自然・色・形・感触・イメージ等に親しむ体験」、「子どもの経験や表現と造形表現を結び付ける遊びの展開」、「造形表現の為の環境構成」、「心身の発達と造形技能の発達についての知識」、「素材に対する知識・理解」、「表現方法についての知識・理解」、「造形表現活動の指導法」、「用具の使用法」、

*岡崎女子短期大学 **岡崎女子大学

「素材・技法を組み合わせる力」の9項目を挙げている³⁾。また、槇(2008)は、造形表現における保育者の役割は「物的・空間的環境構成者」と「人的環境」として2つがあると述べ、前者の立場における援助を「間接的な援助」、後者における援助を「直接的な援助」として造形表現における援助について述べている⁵⁾。

2. 造形活動における環境と保育者の役割

平成30年、幼稚園教育要領を含む3つの法令が改訂(定)された。学校教育において重視すべき3つの資質・能力の基礎を育む場として定められたが、「環境を通して行うものである」という幼児教育における基本方針は変わっていない。では、保育現場の造形活動における環境とは何であるか。

保育現場に関わらず、造形に必要となる要素は、形の元となる「材料」、形をつくる動力であり、形の意図を決定する「人」、人の意図を材料に表す「方法」、加工するための「用具」、形をつくる「場」が挙げられる。一方、保育現場は、子ども、人的環境である保育者、そして物的・空間的環境が存在する。造形における「人」は保育現場では子ども、「材料」、「用具」は物的環境、「場」は空間的環境ということになる。それに加え、保育現場では人的環境である保育者が加わる。保育者はいわば方法の提供や助言を行う立場として捉えることができ、この人的環境である保育者こそ、保育現場をはじめとした教育現場に特有の存在であると考えられる。

その役割について、幼稚園教育要領の総則では、「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」⁵⁾と示されている。また、保育所保育指針においても「保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、(中略)計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。」⁶⁾と示されている。これらの文言から、また、前述した槇の視点も借りて、保育者には

環境を構成するという構成者としての役割と活動や生活を豊かにするという、いわゆる人的環境としての役割が求められていると言えるだろう。

3. 造形活動に必要な保育者の資質・能力

その点を踏まえたうえで、造形活動における保育者に必要な資質・能力を検討すると、まずは制作方法や材料・用具等、造形に関する知識や技術が挙げられる。制作における「方法」は形を生み出す「人」と「材料」と「用具」の間で相互に生まれるものであり、それが造形活動の中で子どものあそびが学びに繋がる大きな要素でもあるのだが、保育の場においては、前述したように手段の提供や助言を行う立場である保育者の援助によって、その過程の充実が図られる。そのため、保育者は専門的な知識を身に付け、その過程が充実し、子どもがより主体的にあそび込める環境を構成する必要がある。

また、人的環境である保育者の言葉かけや振る舞いも子どもの主体的な活動が豊かに展開されるためには重要である。この項目の重要性は保育に関わる者であれば無論のことであるが、造形活動においては、子どもが身近にある色や形に気付いたり、様々な表現を楽しめるように、子どもの年齢や発達段階に合わせた活動を選択し、子どもの表出に気付いたり、子どもの表現を受け止めたり、また、引き出す援助が求められる。

そして、場としての空間的環境も必要であり、どのような状況で活動を行うのか、その空間的環境によって活動のしやすさは大きく変わる。狭い空間では大きな紙に描くことも難しくければ、汚してはいけない場所では泥んこあそびもできないであろう。空間的環境の構成には子どもの姿や時間、施設の状況、学級編成等が関係するため、保育者はそれらを総合的に捉え、適切な空間を構成しなければならない。

更に、保育者の意識もまた保育に大きく影響を与える。保育は子どもの姿を踏まえて行うことが基本であるものの、保育者は子どもに対するねらいをもって日々の保育を行っている。そこにどのようなねらいがあるのか、その意識によって保育は大きく変わるだろう。

以上のことから、本研究では、造形活動に必要な保育者の資質・能力について「造形に関わる知識・技術」、「子どもとの関わり」、「活動の状況」、「保育者の意識」、「その他」の5項目を選定し、分析に使用する。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

A市に勤務する平成28年度から令和元年度の保育経験年数2、3年目の保育者を対象とした講習において、「造形」を受講した保育者94名（平成28年度58名、平成29年度12名、平成30年度10名、令和元年度14名）⁽²⁾

2. 研究方法

筆者らは、平成28年度から令和元年度の毎年、講習前に受講者の意識の変容を調査するための質問紙調査を行った。その質問紙において、「造形に関わる活動を行う上で、困った経験があれば教えてください。」という項目に対する自由記述の回答を90名の受講者（平成28年度57名、平成29年度12名、平成30年度10名、令和元年度11名）から124件得ている。本研究では、それらの回答を以下の方法で分析する。

まず、回答の傾向から、造形を専門とする3名の研究者と保育を専門とする1名の研究者の協議により分類項目を作成する。

その後、124件の回答を、3名の造形を専門とする研究者が、それぞれの回答に含まれる要素を分類項目の中から1つ以上抽出する。3名がそれぞれ要素を抽出した結果、2名以上の研究者によって抽出された項目をその回答の要素として判断し、全回答から抽出した要素の数を分類項目ごとに集計する。なお、1つの回答の中に複数の要素が含まれると判断した場合についても、2名以上の研究者が該当すると判断した項目の全てをその回答の要素とした。

Ⅳ. 結果

作成した分類項目を表1に示す。3名の研究者により、回答に含まれる要素を抽出した結果、124件の回答から160件の要素が抽出された。抽出した要素の数を集計した結果を図1、図2に示す。

図1に示されるように大項目別では「Ⅱ子どもとの関わり」の件数が最も多く、66件（41%）であり、子どもとの関わりの中で多くの課題が発生していることが読み取れる。次いで「Ⅰ造形に関する知識・技能」が61件（38%）であり、上記の2項目が全体の79%を占めていた。一方、「Ⅲ活動の状況」や「Ⅳ保育者の意識」は少数にとどまり、保育者の造形活

表1 分類項目

大項目		項目	
Ⅰ	造形に関する技術・知識	①	絵画制作に関する手順・方法
		②	絵画以外の制作に関する手順・方法（※「制作」のみも含む）
		③	道具の扱い方
		④	材料に対する知識
		⑤	レパートリーの量
Ⅱ	子どもとの関わり	⑥	年齢・発達段階との相応
		⑦	子どもの感性や表現を広げる言葉がけ
		⑧	援助の範囲・程度
		⑨	苦手意識をもつ子・嫌がる子への対応
		⑩	子どもの個人差に対する対応
Ⅲ	活動の状況	⑪	準備（材料、道具の配置も含む）
		⑫	片付け
		⑬	時間や場所による制限
		⑭	子どもの数など学級の編成による制限
Ⅳ	保育者の意識	⑮	保育者の苦手意識
		⑯	保育者の完成や結果に対するこだわり
		⑰	子ども感性や表現への共感
Ⅴ	その他	⑱	保育（あそび）への取り入れ方法
		⑲	保護者への対応
		⑳	その他

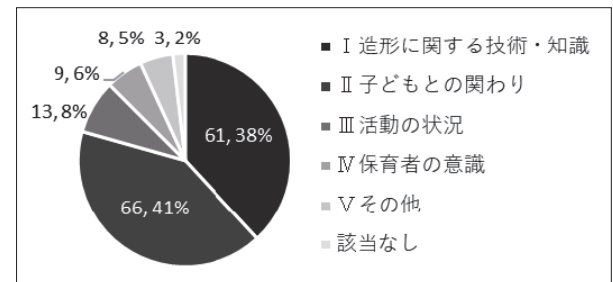


図1 大項目別の回答に含まれる要素数

動における課題の多くが造形に関する知識・技能、あるいは、子どもとの関わりに関する事項であることが読み取れる。

図2に示した項目別において、最も件数が多かったのは「⑤レパートリーの量」で22件にのぼった。次いで「⑨苦手意識をもつ子・嫌がる子への対応」の18件、「①絵画制作に関する手順・方法」17件となっている。大項目「Ⅰ造形に関わる知識・技能」については、件数の多い項目と少ない項目があるのに対し、「Ⅱ子どもとの関わり」については全ての項

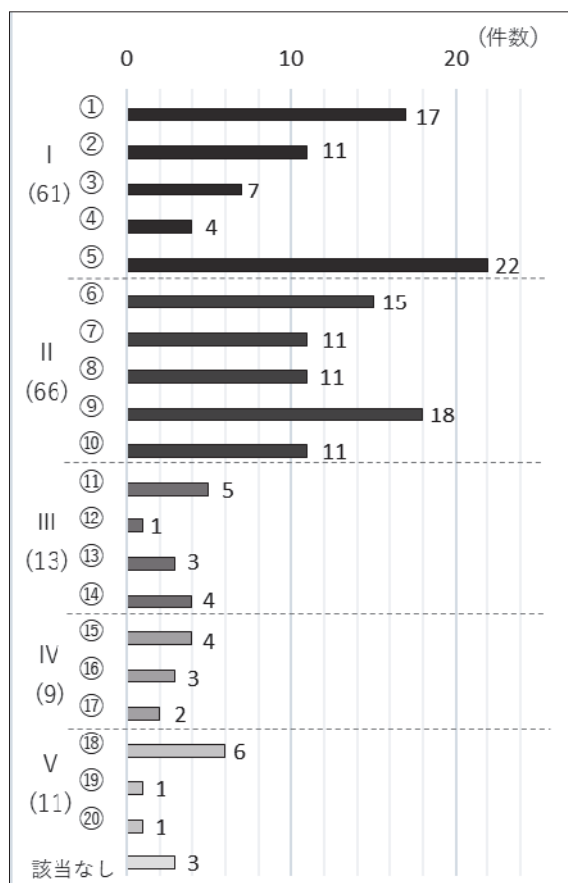


図2 項目別の回答に含まれる要素数

目で10件以上の回答があることが分かる。また、「⑯保育（あそび）への取り入れ方法」に関するものも6件と比較的多いことが見えてきた。次章では、以上の調査結果を基に、造形活動における若手保育者の課題について、考察を加えていきたい。

V. 考察

1. 造形に関する知識・技能

「I造形に関する技術・知識」の項目は、61/160件（38%）の回答があり、5つの大項目では、2位に相当する件数であった。その中で最も多い件数であったのは「⑤レパートリーの量」の22件であった。この件数は、他の大項目を含めた全20項目の中でも最も多い数であった。次いで多かったのは、「①絵画制作に関する手順・方法」の17件であり、こちらも、全項目の中では3位の件数であった。その他は、「②絵画以外の制作に関する手順・方法（※「制作」のみを含む）」が11件、「③道具の扱い方」が7件、「④材料に対する知識」が4件となった。

「⑤レパートリーの量」に関する自由記述は、「乳児でもできる造形遊びはどんなものがあるのか知りたい」、「毎日の製作で、色々なパターンで製作をしたいが、なかなか難しい」等が見られた。多くの保育者が、作り方（パターン）の習得を望んでいる様子が窺えたが、一方で、それは単なる型ではない。造形的なレパートリーとは、保育者自身が日々、日常の出来事に関心を示し、心躍らせるようなテーマを発見することである。決まった作り方に沿って作品を完成させることを目指すと、子どもに作品制作を強要するような結果主義や作品主義に陥る危険性がある。

「①絵画制作に関する手順・方法」の記述内容としては、「絵を描かせる方法をどのように指導していくべきかなやむ」、「子どもの作品にどこまで手や口を出していいのかわからない」、「年齢に合った製作物、又製作の仕方がわからない」等の自由記述が目立った。同様に「②絵画以外の制作に関する手順・方法」でも、「何歳でどのような造形を取り入れるのがよいのかわからず困った」、「身近なものを使った物はどんなものがあるか。やりたいけど、わからない」等、手順・方法以前の段階での方向性やテーマを見つけられない困惑感や漠然とした不安感も記述されている。

なお、「I造形に関する技術・知識」の5つの項目は、相互に関係性を持ち、連動した要素ではあるが、今回は描画を中心とした図画の要素が強い「①絵画制作に関する手順・方法」と立体を含む造形表現、工作の要素が強い「②絵画以外の制作に関する手順・方法（※「制作」のみを含む）」について分類したものであり、「造形」全般の「制作に関する手順・方法」として捉えると、合計27件となり、特に「造形制作全般に関する手順・方法」に対する悩みや不安が多いことが分かる。

「③道具の扱い方」は、「1人ひとりの差が大きくて、はさみを使いたい子もいれば、まだのりも上手く使えない子もいるので、出来ない子に合わせていいのかなやんだことがあります」等、子どもの年齢や発達に関連した道具の扱い方の疑問が多く見られた。例えば、はさみの場合、ケガや安全を気にしすぎるあまり、一切、はさみを使わせない園や使い始める年齢をできるだけ遅らせる園もある。家庭によっては、子どもが興味をもった段階からはさみの使い方を教えるので、子どもによって経験の差が大きく出てしまう。また、研修会ではさみや糊の使い

方を講習するが、多くの保育者が正しい使用方法を理解していない等、教える側の道具の知識不足も課題であるといえよう。いつでも道具が使用できる保育室、教室の環境整備と子どもの個別対応により経験値を上げ、活発な造形活動になる様に支援する必要がある。

今回は、経験年数の少ない保育者による内容のため、レパトリーの不足が記述の多くを占めたが、保育者自身が道具や材料に興味をもち、時間をかけて自分なりの方法を模索しながら、子どもとのコミュニケーションを通して、その場でしか生まれない自発的な表現や子ども自身が表現してみたいと思えるテーマを探し豊かな活動になるようにしたい。今回の「造形に関する技術・知識」に関する不安や困惑は、保育者となり現場に出たからこそその悩みでもあり、講習会や研修会を通して段階的な造形指導の必要性や新しい素材、道具の発信が課題であることを感じる。

2. 子どもとの関わり

「Ⅱ子どもとの関わり」についての回答は66/160件(41%)あり、大項目の中で一番多い数を示した。その内訳は、「⑨苦手意識をもつ子・嫌がる子への対応」が最も多い18件、次に「⑥年齢と発達段階との相応」が15件、「⑦子どもの感性や表現を広げる言葉かけ」、「⑧援助の範囲・程度」、「⑩子どもの個人差に対する対応」がそれぞれ11件という結果となった。

まず、「⑨苦手意識をもつ子・嫌がる子への対応」については「造形に苦手意識があり、何か言われるまで自分からは何しようと思わず、声を掛けてもなかなかできない場合、どう楽しさを伝えていくか」や「絵を描く時に、何を表現したら良いか分からなく、取り組みに時間がかかってしまう。一対一で関わってもなかなか描けない」等の記述が見られた。子ども自身にも得意なことや苦手なこと、興味があることや興味がないこと等、造形活動に対する思いや捉え方は様々である。しかし、スムーズに行える子どもと同じようにできないことへの援助の仕方が挙げられたことに対し、まずはその活動に限らず子ども自身が表現をしたいと思うことが日頃から行っているか、保育者自身がきちんと把握をしなければならぬ。単発的に造形活動を行っても子ども自身に興味関心がない場合は、どのようにして良いか分からず、描けない場合や制作に取りかかれぬ場合

もある。そのため、日頃から子どもがやってみたい、表現してみたいと思える活動を取り入れていくことが重要となる。そのために保育者は子ども達が興味関心を抱く活動を、季節等も踏まえながら子どもの興味や関心に合わせて準備する必要がある。しかし、そのような環境が不十分な時には、子どもが苦手意識を抱いたり、表現活動を嫌がったりすることに繋がってしまう場合もあると考えられる。

また、「⑥年齢と発達段階との相応」については「何歳でどのような造形を取り入れるのがよいのか分からず困った」や「乳児(0.1才児)は製作とかをやる時、どこまでの活動をすべきなのか」等の記述が見られた。乳児には、小学校のように決められた活動や到達目標があるのではなく、幼稚園教育要領の第2章ねらい及び内容の「表現」では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現力を養い、創造性を豊かにする。」⁷⁾と記されている。多くの場合、一人の保育者が入園から卒園まで持ち上がりで保育を行うわけではない。年齢ごとに担当保育者が変わるが、年齢ごとに活動が決められているのではなく、目の前の子どもの育ちや、興味・関心に合わせて、造形活動を組み立てる能力が保育者には求められている。さらに、このことについては、発達に合わせた活動だけに限らず、前節で触れた保育者として造形活動のレパトリーが少ないことと通じる課題でもありとされる。造形活動を通して心情・意欲・態度を育てることができる内容は多岐にわたっている。今後は多様な造形活動の方法を講習等で示していく必要があるだろう。

また、この項目に該当した回答のうち、乳児に関する回答が4件あった。数としては少ないが、研修会や養成校の授業では乳児の造形活動について、どのようなことができるのかと言った問いをよく受ける。確かに、乳児は幼児に比べて身体的発達はまだ未熟であるものの、赤ん坊が光るものや動くものに興味をもち、手を伸ばすように、感覚機能は十分に働いている。保育所保育指針における1歳以上3歳児未満のねらい及び内容の「表現」には、「諸感覚の経験を豊かにする」や「自分なりに表現しようとする」、「イメージや感性が豊かになる」⁸⁾といった表現することを楽しむ前段階のねらいが示されているように、作品を作ることだけが造形活動ではなく、感じることやそこから何かしらの表出が見えること自体に意味があると考えれば、絵を描く、工作する以外にも

多様な活動が可能となる。

なお、その他3つの項目「⑦子どもの感性や表現を広げる言葉がけ」、「⑧援助の範囲・程度」、「⑩子どもの個人差に対する対応」においても全体として割合が多く、子どもとの関わりについては多くの受講者が困った経験があるとの回答を示した。そのため、保育者養成校での指導や講習では、具体的に例を示していく必要がある。とはいえ、保育現場で保育者は、例では示しきれない子どもの姿に多く直面することになる。本節で述べた「子どもとの関わり」については、いずれも子ども一人一人の活動の様子や場面に合わせた言葉がけや援助が必要になる項目であり、子どもの表現や表出に気付き、寄り添ったり、受容したりすることのできる感性を身に付けていなければならない。だからこそ、保育者自身が子どもの様に表現すること自体を楽しんだりする等の「結果」ではなく、その「過程」に起きる心身の動きを体感する機会を増やしていくことが必要なのである。

3. 活動の状況

「Ⅲ活動の状況」の回答は、他の大項目に比べて13/160件（8%）と少数であった。その中で最も多くの件数であったのは「⑩準備（材料、道具の配置も含む）」の5件であった。回答は「一人当たりどのくらいの粘土があるとよいのか」、「机の上に用意していくもの」といった、材料や用具の量や配置に関するものや「環境の準備の仕方（どのように環境を整えたらよいのか?）」といった物的・空間的環境の構成に関する課題が見られた。保育現場における造形活動についての出版物は多くある。しかし、そこに示されている内容は、大抵の場合、必要な材料や用具、保育の方法、配慮や援助のポイントといった内容であり、具体的な材料や用具の量や配置、環境の構成について記載されているものは少ない。同じ活動でも子どもの年齢や園の設備環境によって適切な環境が異なるからだ。適切な物的・空間的環境の構成のためには、日常の子どもの姿と行う活動を結びつけることが必要とされる。一方で、智原らの研究（2015）によると、造形活動は他の音楽表現や身体表現、言語表現の活動と比べて単独で実施されることが多いとされている⁹⁾。造形活動に対する特別な意識があり、その結びつきを困難にさせているのだろうか。智原らが「造形活動そのものが素材に手で触れ、形を変えていくという身体感覚で行

う行為」¹⁰⁾ というように、造形活動は特別な活動ではなく、日常の子どもの姿と結びついている。その点に気が付くと、前述した日常の子どもの姿と活動を結び付け、子どもが主体的に遊べる環境を構成することが可能になってくる。とはいえ、講習や研修の際には、材料や用具についての特徴だけでなく、提供方法等についても例を挙げながら具体的に提示していくことで、課題解消の一端に繋がるのではないかと感じる。

次に多かった回答は「⑭子どもの数など学級の編成による制限」の4件である。回答は、「年少から年長まで一緒に生活をしており、気になる子もいるため年長児に自由にはさみやのりを使わせてあげることが難しく、経験不足が感じられる」等の縦割り（異年齢）保育による問題が4件中3件あった。これらの回答の背景には、A市立のほとんどの保育所では、3～5歳の縦割りで学級を編成していることが挙げられる。縦割り保育では、前述した回答の様に、道具等が自由に使えないといった問題や制作時間の差等の配慮が必要な点も多くあるだろう。「一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない」¹¹⁾ と幼稚園教育要領には示されている。第1節で述べたように、はさみや糊などの道具の使用については、年齢に関わらず、子どもがその経験をしているかどうかが使え、使えないということに直結する。保育者がしっかりと使い方を子ども達に伝え、自由に使える環境を整えることが望ましいと考える。

4. 保育者の意識

「Ⅳ保育者の意識」の項目の回答は、9/160件（6%）と少数ではあるが、保育者自身の課題について具体的に記されていた。「⑮保育者の苦手意識」は4件あり、「アイデアが浮かばない」、「上手に作れない」等、自分自身の問題として捉えていると感じる。「⑯保育者の完成や結果に対するこだわり」は3件あり、「良い作品を作ろうとして、子どもをしばりつけている気がする」、「作品を作ることに意識がいきがちで、子どもたち楽しさを伝えることが難しい」等、出来ばえを重視する考え方が子どもに負担をかけていると感じているものの、どの様にすればよいのか分からないという戸惑いを感じる。「⑰子どもの感性や表現への共感」は2件あり、「一人一人に丁寧に関われず、イメージに共感してあげられない」、「子どもが作るものをイメージしながら作るこ

とが難しい」等、子どもの思いに応えきれていないと考えている様子が伝わる。3つの項目の記述内容から、保育者は自分自身の力量不足を課題として感じており、子どもへの関わり方に自信がもてないことが窺える。また、保育者自身が、上手と下手、良い作品と悪い作品、イメージに合うと合わない等、自分自身の物差しで、子どもの表現を捉えているのではないかと感じる。

まずは、保育者自身が自由な表現を思い切り楽しむ機会をもってみてはどうだろうか。「結果」よりも「過程」に充実感をもち、自分なりの表現やイメージを楽しむ経験を重ねることで保育者の意識に変化が見られるのではないかと考える。保育者が苦手なことを、子どもたちも楽しむことができないということはない。子どもの興味や関心を探りながら子どもの活動を支えていくことで、子どもは思いもよらない表現を楽しむこともある。イメージは一人一人違っているからこそ、伝え合ったり、分かり合ったりする喜びが感じられると考える。

5. その他

「Vその他」の項目の回答は8/160件（5%）であった。「⑩保育（あそび）への取り入れ方法」は6件あり、「造形を保育中に行えない」、「なかなか取り入れることができない」等、そもそも取り入れることが難しい環境や、「どのように取り入れていくのかわからない」、「あそびの中にどのように造形に関わる活動を取り入れていけばよいか」等、造形を特別な活動と捉えている内容や、「楽しい遊び方がわからない」、「子どもにおろすとバタバタしてしまう」等、楽しさやスムーズさを求めるために困難さを感じている内容があった。また、「⑨保護者への対応」として、「人の顔や丸がうまく描けないと悩む親へのアドバイスに困った」という保護者支援の視点の内容もあった。

「⑩保育（あそび）への取り入れ方法」については、保育者が造形活動とあそびを切り離して考えていると感じる。もちろん、教材を準備して行う造形活動もあるが、普段のあそびにすぐに取り入れることができる造形活動もある。広告の裏に絵を描くことや粘土を丸めたり、伸ばしたりすることも造形活動の一つである。また、普段のあそびが既に造形活動となっている場合もある。色水あそびや砂場あそび等も同様である。線を描くことが楽しい、形になることが嬉しい、色の不思議を感じる、感触が面白

い等、子どもが豊かな感性を育み、自分なりのイメージを表現して楽しむ経験を重ねていくことができるように、あそびを大切にしたい保育が造形活動の楽しさに繋がっていると考える。

VI. まとめと今後の展望

本研究では、A市からの委託事業として平成28年度より実施している、保育経験2、3年目の保育者を対象とした講習において実施した質問紙調査の回答を用いて、若手保育者が抱える造形活動における課題を明らかにし、本講習の改善に繋げることを目的とした。

調査の結果、課題の多くは、「造形に関する知識・技能」と「子どもとの関わり」に関するものであることが読み取れた。項目別の結果において、最も多くの件数が見られたのは、「⑨苦手意識をもつ子・嫌がる子への対応」であり、次いで「⑤レパートリーの量」、「①絵画制作に関する手順・方法」であった。しかし、本研究では、描画を中心とした図画の要素が強い「①絵画制作に関する手順・方法」と立体を含む造形表現、工作の要素が強い「②絵画以外の制作に関する手順・方法（※「制作」のみも含む）」について分類していたため、これらを「造形」全般の「制作に関する手順・方法」として捉えると、最も多い件数となり、「造形制作全般に関する手順・方法」に対する悩みや不安が多い結果となった。

また、調査結果を踏まえて考察を行った結果、「造形に関する知識・技能」という視点からは、若手保育者がレパートリーの不足を感じ、習得を望んでいる様子や制作手順・方法以前の段階で方向性やテーマを見つけることができない様子、はさみや糊等の基本的な道具の使い方を保育者自身が習得していない可能性等が見えてきた。「子どもとの関わり」からは、レパートリーの少なさから、子どもの興味・関心や発達段階に合わせた活動内容の選択が困難になっている可能性や、「活動の状況」からは、造形活動における子どもの姿が予想できないことから物的・空間的環境の構成に戸惑っていたり、縦割り（異年齢）の学級編成に対応できなかったりする様子が窺えた。「保育者の意識」からは、保育者自身が力量不足を感じ、子どもへの関わり方に自信がもてない様子や自分自身の物差しで子どもの表現を捉えている可能性も窺えた。更に、「その他」における考察からは、造形を特別な活動と捉えている様子も感じら

れた等、様々な若手保育者が抱える造形活動に関する課題やその要因をについて考察を深めることができた。また、それらの課題の克服に向けて、段階的な造形指導の必要性や新しい素材、道具の発信、具体的な子どもの姿や材料・用具の提示方法を示すことが今後の課題として見えてきた。

一方で、多くの保育者が望んでいる制作方法は1つの型でしかなく、具体的な子どもの姿も例でしかない。子どもが主体的に活動し、材料や用具、身近にあるものや自然を感じ、その関わりの中で自分なりに表現することを楽しむためには、その援助を行う保育者自身が、その活動の楽しさや、その活動によって育まれる心身の動きを体感している必要があることも、本研究によって再確認できたといえよう。

以上のことから、保育経験2、3年目の保育者を対象とした講習では、講習が保育者にとって、日常の出来事に関心を示し、心躍らせるようなテーマを発見したり、道具、材料に興味をもち、時間をかけて自分なりの方法を模索したり、自由な表現を思い切り楽しむといった、「結果」よりも「過程」に充実感を感じ、自分なりの表現やイメージを楽しむ経験を積む機会となると同時に、段階的な造形指導によって新しい素材、道具の発信、具体的な子どもの姿や材料・用具の提示方法を示すことで、造形活動を日常の生活やあそびと結び付け、あそびを大切にしたい保育が造形活動の楽しさに繋がっていることを理解できるように改善していくことが今後の課題である。そのことが、本研究で見えてきた若手保育者の課題を解消することにも繋がるであろう。本研究で得られた示唆を基に今後の講習や研修、保育者養成校における指導にも活かしていきたいと考えている。

付記

本研究は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理審査による承認を得て施行した（令和元年度通知番号53）。

本稿は、I～IV章、V章3節、VI章を横田、V章2節を米窪、V章4節、5節を野田、V章1節を佐善が執筆した。

注

- (1) 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学協働推進センター発行（2019年5月）の講座実施要項の概要より引用した。
- (2) 平成28年度の人数が極端に多いが、平成28年度は講習の対象者全員が造形の内容を受講したためである。平成29年度より、5つのコースから1つを選択する形に変更となったため、年度毎の受講者人数に差が出ている。

引用文献

- 1) 佐藤弘毅他（2011）文部科学省平成21-22年度先導的の大学改革推進委託事業「短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究成果報告書」pp. 57-93
- 2) 松下明生（2016）「保育者に必要な造形能力についての研究—アンケートから見る保育者が必要と考える造形能力についての検証—」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第38号、pp. 93-102
- 3) 智原江美、鍋島恵美、和田幸子、下口美帆、田中慈子（2015）「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育のあり方—京都府南部の幼稚園・保育所へのアンケート調査からの検討—」、『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第53号、p. 124
- 4) 槇英子（2013）『保育をひらく造形表現』萌文書林、p. 88
- 5) 文部科学省『幼稚園教育要領』（平成29年告示）、p. 5
- 6) 厚生労働省『保育所保育指針』（平成29年告示）、pp. 5-6
- 7) 5) に同じ。p. 20
- 8) 6) に同じ。p. 15
- 9) 3) に同じ。p. 129
- 10) 3) に同じ。P. 122
- 11) 5) に同じ。p. 5